「八溝方言ごじゃっぺ辞典」

ごじゃっぺの意味

・普通は　聞き流せる程度のいい加減な冗談

・悪い意味では　聞き捨てならない嘘

→許容範囲が広いことば

ここでの「ごじゃっぺ」は間違いや勘違いのこと

「理解が不足でいい加減」という意味

悪意は無い

『八溝方言ごじゃっぺ辞典』は

昭和30年前後の小学6年生から中学生の体験

「私小説」＝自分の生活体験から心境を述べる

私が体験した八溝言葉　旧大内村

旧那須郡大内（発音は「おおじ」）村大字大内
　栃木県東端の県境　合併後も町場から一番離れていることに変わりない
江戸時代までは水戸藩領
　支配体制面も茨城文化圏　姻戚も茨城に多い
村の南端を貫通する大子街道による茨城や福島南部との交流(FITの原形：3県の頭文字)
中山間地の畑作地の共通の言語
タバコ　コンニャクなど生産の仕組みの共通性
→栃木県のことばに茨城と福島のことばが重層
　地域独自のことば遺存

私の少年時代　旧大内村の風景

大内中学校（大字大内　谷川　盛泉　大那地）
全生徒数

昭和	22	25	30	40	50	55
	238	314	337	306	152	102（統合）

タバコ・コンニャク・林業　最も輝いていた時代

昭和30年代
1次産業で多くの人口を抱えることが可能な時代
この時代に小中学生であった巡り合わせ

なぜ、今方言を考えるか

方言とは　それぞれの地域の暮らしや歴史との深い関係

―― 方言は地域で受け継がれた言語遺産 ――

・方言を調べる→地域の伝統、ことばの背景にある
　　地域の基層の文化を知る

・方言を見直して地域の歴史を再考し、多様な文化
　　を認め合う

失われつつある方言に光を当てる

有形無形の文化財　保存　写真等で次代に継承可能

形のない言葉は記録に残さないと消えてしまう

→それでも文字で表現できないニュアンスは再現不可能

方言にも種類があります

1地域的方言　特定の地域限定で使われる

音韻：語彙などに差異

栃木弁　「おおこわい（ああ疲れた）」

「ぜんえんでえすかたづけろ」

2社会的方言　職業　性別などによる違い

例　宮中の女房言葉

おひや　しゃもじ　おなか→男性社会にも

ヤクザのことば　職業集団　独自の結束・専門性

3若者方言　例渋谷方言

方言の範疇かどうか　変化が激しい　一般化も

例　きもい　うざい　やばすぎ

方言は時代とともに変わります

奈良時代

中央集権による強い言語政策はない

「畿内のことば」や「東ことば」

　各地方に独自の言語圏を形成

例　万葉集東歌　下野国

下野の三毳（みかも）の山の小楢（こなら）のすまぐはし児ろは誰（た）が笥(け）か持たむ

（下線部　東国方言）

「東ことば」 地域語として承認

「標準語」は源氏物語と同じか

平安時代　貴族が使う公家ことばが理想

少数者の特定の言語で、共通語にならない

一方、東国ことば　坂東戎（えびす）→蔑視

鎌倉時代　徒然草　東人（あづまうど）

堯蓮上人の段「声うちゆがみ　荒々しくて」

兼好自身の体験

江戸時代　将軍家出身の三河ことばが重視

その後　参勤交代　経済・交通網の発達

江戸土着語＋全国のことば＝江戸語

→近代日本標準語の土台

明治時代の言語政策

標準語:中央集権国家　規範となる言語

公文書の統一　富国強兵　殖産興業のため必須

→日本語の統一　近代国家への基盤

(西欧の先進国同様な言語政策)

東京の中・上流階級のことばをモデル

書きことばから先行実施(後に言文一致運動)

日清戦争を契機→標準語教育　方言撲滅運動

※地方のことばを「方言」として蔑視

（沖縄の方言札）

戦後の方言の見直し

高度経済社会の終焉　多様な文化の受容

「ディスカバージャパン」　旧　国鉄1970年

■日本を発見し　立ち止まって自分を見つめる

→伝統や地方の見直し

・山口百恵　「いい日旅立ち」

・郷ひろみ　「エキゾチックジャパン」

・「おいでませ山口」方言によるキャンペーン

■各地で方言の語り部　方言に誇りと自信

・沖縄や奄美の民謡　津軽や南部弁の歌謡曲

・地方を舞台の連続ドラマの人気

自分の土地の
ことばが好きですか？　ＮＨＫ全国調査

栃木県　Yes　５１．５パーセント（４２位）

最下位　茨城県

ちなみに　１位　沖縄　８３．０パーセント

２位　岩手　７４．５パーセント

北関東「とかいなか」都会でもない、

田舎でもない　首都圏に属し、独自性が乏しい

そんな中、栃木県の方言の特徴は？

アクセント

栃木では

・端と橋　はし　平板でどちらも強弱がない

・雨と飴　あめ　どちらも語頭が高く区別なし

栃木県民の多くはアクセントについて無自覚

区別を聞き分けられない→当然話せない

※足利及び両毛地区は群馬県と近接している

→西関東の東京アクセントに近い

イントネーション

イントネーションとは　―　単語でなく語句や文単位の発声の抑揚(調子の高低）

一般には　命令は下降調　疑問は上昇調

栃木県全体的に　尻上がり

特に敬意：同意：勧誘など相手を意識すると尻上がりが強くなる傾向

「いやまあ　悪がったね」

（八溝に尻上がりの傾向が一段と強い）

→普段は気にしていない

近年　つぶやき史郎　U字工事など栃木弁の認知度向上とともに

栃木県、特に八溝のことばの発音の特徴　1

「い」と「え」の混同
これは日常で最も苦労する
氏家駅　ローマ字で一発変換が困難
他に貿易　現役などは打ち間違いが頻発

（上一段と下一段活用　イとエの区別が出来ないまま、
16年も受験の古典を教えていた。生徒が賢かった）
他に
「ち」と「つ」が曖昧
三菱鉛筆「みちびしいんぴつ」
「ひ」と「へ」
蛇姫様「ひびひめ」

栃木県、特に八溝のことばの特徴　２

濁音化

蜂→ばじめ　柿→かぎ　蜘蛛→くぼ
畳→ただみ　紐→ひぼ　薩摩→さづま
反対に「１時間目」→いちちかんめ

拗音の省略

手術→ しりつ　出発→ しっぱつ
大丈夫→だいじぶ

音転換

寂しい→さみしい　寒い→さびー
黄色→きゅうろ

促音化

追いつく→おっつぐ　押し圧（へ）す→おっぺす
押し飛ばす→おっとばす　突き返す→つっけす

栃木県、特に八溝のことばの特徴　3

ベーベーことば　（八溝では「ペ」を多用）

「ベーベーことばがながったら

　　鍋や釣瓶はどうするべ」

べ（ペ）　古典の「べし」に通底

明日はお天気になっペ　　推量

一緒に行ぐべや（いんべや）　勧誘

こわぐなった(疲れた）がらやめっペ

　　意志

多分だいじだんべ　確信を持った推量

栃木県、特に八溝のことばの特徴　4

接頭語

かっぺなす（貶す）おっぱじめる（始める）
こったんね（もの足りない）　ぶっくらす
つっぺる　おっちゃぶす　されがまね

接尾語

へだっかす（下手）ちんちめ（小鳥：特にスズメ）
かんかんめ（蚊）　びりっけつ　たまっこ
め：動物昆虫など生き物全般に使い、蔑称と親愛の両方の意味を付加する
例　とんこめ：当年子め　1才馬　家族の一員
こんちくしょうめ　がぎめら　おがんじめ

栃木県、特に八溝のことばの特徴　５

無敬語地帯と言われ　野卑な言葉とされていた

敬語の未発達の理由

・他地域との交流が少なく未知の人との出会いがな

・小さな共同体　　・身分の差が少ない

それでも　組内の常会などでは敬語を使用

おあがんなんしょ　　おがまいはりゃすな

はやくしなせ(尊敬の命令)いきやんすか

直接敬意の丁寧語の「お」「ご」の多用

おきゅうじ（お給仕）　おたのみしゃす

※第三者への敬語はほとんどない

あのひとはきなさるか→あのひとはくっぺが

八溝のことばは奥が深い

今では死語となりつつある八溝のことばが

・古い京言葉が伝播　京都を中心として広がり、遠いほど遅く伝わったので、その分後まで残っている。

・九州や関西方面のことばと共通する。常陸の塩の道、九十九里の干鰯（ほしか：いわしの肥料）、瀬戸内塩などの流通から関西のことばが江戸をとおさず移入

・宗教用語が自分たちの都合に合わせて定着した語彙が豊富である。地域の信心深さ

（ことばはマイナス感情が残る傾向）

・茨城、福島

八溝の言葉は南東北と北関東東部の交接点

（ F福 I 茨T 栃）　３県の交流の意味と今後の発達の期待

八溝のことばの数々

由緒ある八溝のことば

あったらもん：語源「あたら」漢字：可惜

源氏物語にも所出　もったいないの意味で「可惜若い命を失う」　可惜が転訛「あったら」に。「もん」は「もの」の転訛で、「もうけもん」などと同じ。都から遠く離れていた山間に残る貴重なことば

ざんぞばなし

讒訴（ざんそ）、あるいは讒奏が濁音化した。讒訴は、事実を曲げて上司に訴えること。そこから陰口を言うという意味になった。年寄り婆さんがお茶のみをしながら嫁の「ざんぞばなし」をしていた。

（菅原道真は藤原氏の讒訴によって太宰府に流罪となる。平家物語の俊寛僧都は讒訴によって鬼界島に流された。

由緒あることばである。

（薩摩硫黄島　足摺岩

平成12年12月）

おかんじめ

乞食のこと。元来は寺の建立、維持などのために各地を廻る勧進のこと。弁慶の勧進帳もおなじ。やがて「ものもらい」となり、蔑みの「非人」と表記。

五木の子守歌

おどみゃかんじんかんじん　あんひとたちゃよかしゅ　（遠く離れた九州と同じことばが遺存。京都から地方に少しずつ伝播、遅く伝わり社会変化のない地域に残っていると思われる）

「コンクリートから人へ」で工事が中止された五木村の川辺川ダム。
自分を「かんじん」と言っている被差別地域の少女は、前のめりになりながら遠く故郷の音を聞こうとしている。盆の来ことだけを心待ちにしている

とんぼたてる

とんぼは「戸臍（とぼそ）」のこと。

戸を上下に挙げる際に回転するヘソ(穴）を指した。今でも古寺社の戸は上下に開く。とぼそは「閉める」のでなく「たてる」が正しい。「とぼそをたてる」は貴重な言葉の伝播。

（子どもの頃は毎日引き

戸の開け閉めが日課だった。

雨戸１０枚ほども収納する

戸袋に手を挟んだり、強引

に開け立てして戸が外れる

苦労もあった）

ごせやげる

「ごせやける」がさらに程度が進むと「ごせっぱらやげる」となる。後世は死後の世界のこと。「やける」は「世話が焼ける」などと同じ。この世だけでは間に合わず、あの世にまで持ち越す怒りがあること。

「御託を並べる」、「意地焼ける」など宗教的な深い意味のことばが、マイナス感情を表現する俗世間のことばになっているものが多い。

ころひく

甲羅を経ること、あるいは高齢を経るか。年齢を重ねることが語源。悪い意味だけに限定され、悪知恵が身に付くことを言う。次の世代には通じない。宇都宮でも一定の年齢層には通じる。

いんがみる

「今度っきり風邪ひいで、よぐよぐいんがみちゃた」と、よめごと(世迷い言)をいう。因果応報のことであるが、本来は良い行いでよい結果になることをいうが、自分が不節制だったことを理由に、原因を神仏のせいにするのは世の常である。「みる」は「馬鹿を見る」などと同様に、遭遇すること。

でほらぐ

放埒(ほうらつ)が語源。馬が埒(らち:囲い)を出て気ままに行動すること。接頭語「で」がついて、思いきり自由にすること。そのことから、何の考えもなく思いつきを口任せにしゃべることの意味になった。

子どもの頃からですっぱぎ(出過ぎ)であったので、「いづま　でほらぐばーし(ばかり)かだって(語って)ねどごっこと勉強しろ」と言われた。人生では潤滑油として結構役立ってきた。反対の「埒があかない」よりはいいがなと思ったりして。

きたい

稀代と表記。標準語では、滅多にないことで、世にも珍しいことの意味で、時には不思議であるとか、おかしいという意味にも使われる。

　ところが、「子どもなのにきたいだね」と言われれば褒められたことである。一般にマイナスの感情が継承されるのに「稀代」は反対に、滅多にないほど立派である、良い行いをする時にも使われた。

おじぎ

辞儀(宜）と表記、遠慮のこと。あれこれ遠慮の言葉を言うと、「そだにお辞儀しねで、ゆっくりしてったらよがんべ」と進める。もともと辞儀は頭を下げて挨拶をすることで、江戸言葉が八溝に定着したものである。今の世代では全く使われない

ぴんや

ガラス箱をヨモギの葉っぱできれいに磨き、ピンやに出掛ける。「ピンヤ」は身近なことばであったので、英語Pierの訛りであることとは全く思わなかった。近代的な建築用語が八溝にも入ってきたのであろうが、語源と別な音になっていた。北陸自動車道のピアパークは海中に橋脚を建てたもの。

けっちん

発動機を始動させるときに、弾み車（ふらいんぐほいーる）を勢いよく回すが、時々爆発の頂点の狂いで逆回転を起こして、手に大きな衝撃を受けることがある。「けっちん食う」という。予想外の衝撃や、人からのしっぺ返しも「けっちん食った」言った。内燃機関用語の「kicking」であることは知らなかった。

さぶろ

ショベルがシャベルになりさらに「さぶろ」に転訛。オランダ語のスコップも併用。かぐ（角すこ）剣スコ　ゆぎ（雪）スコ

幼稚園の砂遊びでは「シャベル」と原語に近い用法

さらに　こんな言葉も

ひゃくじっこ（百日紅）　つけぎ(付け木）

らんとば(卵塔場）　こじはん(小時飯）

もやい（もやう）　もがり（虎落）

あてがいぶち（宛がい扶持）あんべわり（塩梅悪い）

ごたく（御託）　ちょうしもっこ（調子畚）

てばたき（手叩き）　そばえる（戯える）

せな（背な　兄な）　じんだら（地蹈鞴）

けたくそ（卦体くそ）　ようぐし（魚串）

あてごとほでもね（当て事放題）　ほまぢ（帆待ち）

ほおどし（頬通し）　やくてーもね（益体）

意味の変わったことば

やがで

子どもの頃のＮＨＫラジオ「やがて１２時をお知らせします」
すぐに時報　時計がない時代は時間をアナウンスする必要

いつの間にか「まもなく１２時の時報です」に変わる。

今はコメント無し

八溝のやがて　「やがーで買ってやっから」　ほぼ諦め

広辞苑「やがて」①間に介在するものがないさま。すぐさま

②おっつけ。そのうち

八溝で親が言う「やがて」は②の意味で使う

金肥　本来は干鰯・搾め滓など　たばこ生産に必須　堆肥厩肥など自家生産　今は化学肥料のことをいう

自然薯　本来は山に生えている山芋。今は塩ビで作られた畑のものも「自然薯」と桃太郎旗　畑の掘り残しのコンニャク

ちょごっと　これ方言ですか

・もやいっこ　船が集まる「舫う」「催合う」ことの転訛　結いのこと

・「うんめー」　鼻から息を出す音。口を尖らして「う」と発音しない。

古代の梅は「むめ」馬は「んま」に近い音　古代の発音

・急須「きびしょ」　東北、北陸　九州も　喫茶とともに伝来

・「さいな」　大阪では「さいなら」　方言でなかった「さようならば」が語源。「さらば」は「さあらば」の短縮形

・狡い　「こすい」　大阪　高知など　江戸時代の狂言など

・ごんど　大きいごみ　もとはごみだめ「埃所」は方言でない

・お晩とお晩方　「お晩方です」は夕方　方言でない

・こわい　疲れる　東北の他　愛媛県大洲市（おおず）

（大洲は古くは宇都宮氏の城下町）

八溝のことばに転訛が多かったのは

「書きことば」が日常生活に普及していない

耳からの話ことば中心の言語生活

地域外から伝承される漢語や外来語の原義を理解していないまま消化する

現在　学校教育　新聞などの普及アクセントやイントネーションを除けば標準語と差異がない

- 逆に

現在は漢字に引っ張られて、本来連母音の法則などの音韻変化までを無視して、字音どおりに発音する傾向にある　例　うじいえUJIIE

八溝のことばをとおして考えたこと

過疎化の波の中で

過疎が方言消滅に拍車を掛ける→その結果世代継承が無く、地域文化も消滅。記録はしてみたものの、文字で記録した方言は「方言」と　言えるか。

→話されてこそ「方言」

今後の地域は

ことばは時代とともに変わり、経済発展とともに方　言を包含する地域の文化は失われていく。

→八溝も多様性のない表層の文化に覆われていくか。

疑問が

自分の方言への取り組み　意味があるか？

生まれ故郷への貢献はできるのか？